Mero Sathi Project 2016

February

私たちは２月に Mero Sathi Project February として上智大学、東京大学、東京経済大学、近畿大学、啓明学園高校の学生８名が集い、タイとネパールで活動を行った。今回のツアーの一番の目的は、８月のツアーで失敗に終わった教育支援プロジェクトの再挑戦であった。前回の反省を生かし、ツアー出発前に現地で万全の準備を整えておいた。そのため日本メンバーは現地で支援活動を行うというよりも、現地での支援体制がきちんと整えられているかを確認するという任務が主であった。具体的に言うと、支援施設の完成の確認や、支援プロジェクトに関わる現地の村人へのインタビューなどを実施した。これらの活動はネパールメンバーの協力があってこそ実行できたものである。当報告書では、日本、ネパール両メンバーにより現地での活動を報告するとともに、当ツアーの目的の一つでもあった学生交流についての考察を日本メンバーより述べたい。

学生リーダー　吉川夕葉

＜研修日程表＞

２月１２日	成田→タイ、バンコク	ラームカムヘン大学の学生と夕食
１３日	バンコク→カトマンズ	ネパールメンバーと顔合わせ オープニングイベント
１４日	カトマンズ	NGO、孤児院訪問
１５日	カトマンズ→ヌワコット	仏教寺院見学、被災地に移動
１６日	ヌワコット	被災現場、ヤギ小屋見学、 インタビュー実施
１７日	ヌワコット→ポカラ	クッキング交流、バス移動 ポカラ散策
１８日	ポカラ→シクレス	ジープ移動
１９日	シクレス	ヒマラヤハイキング、Owl Festival 参加 （ダンス披露）
２０日	シクレス→ポカラ	グルン族インタビュー ジープ移動
２１日	ポカラ	私立小・中学校で国際運動会実施
２２日	ポカラ→カトマンズ	サンセットハイク、10 時間バス移動
２３日	カトマンズ	ミニディスカッション、国営ラジオ出演 クロージングセレモニー、お別れ会
２４日	カトマンズ→バンコク	トランジット
２５日	バンコク→成田	

プログラムコーディネーター
氏名　Kshitiz Bhattarai (AAEE メンバー)

アシスタントコーディネータ　(1)
氏名　Sharad Kumar Sharma (AAEE ネパールコーディネーター)

プログラムスーパーバイザー（ネパール内全行程同行、日本語、英語）
氏名　　関昭典（ＡＡＥＥ代表理事）

≪メンバー紹介≫

✈✈✈ From Japan ✈✈✈

吉川夕葉
・ Student Leader
・ 上智大学総合グローバル学部１年
・ 着眼点が鋭い
・ クールに見えてアツい

永淵沙也花
・ Student Leader
・ 上智大学総合グローバル学部１年
・ ポジティブ
・ みんなを笑顔にするハッピーガール

米原槙子・
上智大学総合グローバル学部１年
・ 親しみやすさ NO.1
・ 何事も真剣に考える

山岡大地（ネイチャー）
・ 上智大学総合グローバル学部１年
・ 皆を引っ張る存在
・ カメラマン
・ 代謝の良さが尋常じゃなく、ネジが外れると面白い

小田硯規
・ 東京大学文科三類１年
・ 誰とでもすぐに仲良くなる
・ とにかく素敵な笑顔
・ 頭の回転が早く、しっかり者

吉田梨乃
・ 啓明学園高校３年
・ 最年少で挑んだ、スーパー高校生
・ オンオフの切り替えがしっかり
・ 意外と乙女

劉寛艶
・ 東京経済大学院１年
・ 優しくて気配りができる頼れるお姉さん
・ 天然！？
・ テンションが上がると人が変わる

大平啓太
・ 近畿大学経済学部会計学科３年
・ 圧倒的なコミュ力を誇るムードメーカー
・ 人生の先輩
・ 強い信念を持っている

Asia Association of Education & Exchange

✈✈✈ From Nepal ✈✈✈

Kshitiz Bhattarai
- プログラムコーディネーター
- 皆のまとめ役
- 賢く、頼り甲斐がある、イケメン

Sharad Sharma
- いつも皆を気にかけている
- ムードメーカー
- 仕事が早く、的確
- 頭が半端なくいい！

Shrijana Poudel
- Student Leader
- クールでしっかり者
- ミランダカーそっくりの美人
- Kshitiz 同様まとめ上手

Sonuj Giri
- しゃべりだすと止まらない
- 優しくて誰とでもすぐに仲良くなれる
- 興味が幅広く知識が深い
- 値切り上手

Grishma Bhattarai
- とっても明るくて優しい
- 涙もろい。笑顔が輝いている
- かっこいい一面あり！？

Asia Association of Education & Exchange

Bibhuti Malla

- 話しやすく、気軽に声をかけてくれる
- 物事を深くまで考えている
- 真面目だけど、イケてる
- 自分の考えをしっかり持っている

Shreeya Davkota

- クールビューティー
- おしゃれ
- 親身になって話を聞いてくれる
- 頭脳明晰で頼りがいがある

Saujanya Pokhrel

- かわいい愛されキャラ
- ツボが浅く良く笑う
- 最高にノリがいい
- サングラスが似合う

Marbal Sunuwar

- おしゃれ番長
- サッカー大好きなシャイボーイ
- 音楽好き
- 将来大物になりそう

≪参加者の感想≫

「FACE　to　FACE で交流する重要性」

大平啓太（近畿大学３年）

交流に必要なことは FACE　to　FACE である。これは国際、学生に問わず言えることだと考える。顔を見せ合い、同じ時間・空間を共にすることで相手を理解することができるためである。

近年、技術革新の激しさから人と人の交流は直接会わなくても容易にできる。例えば、LINE や Skype などの方法があげられる。また、SNS を通じ相手の行動を簡略ながら把握することができる。ゆえに、私たちは FACE　to　FACE で交流する重要性に気づいていない。むしろ、その利便性から FACE　to　FACE を避ける傾向にあるのではないかと考えられる。

私はプロジェクトを通じ改めて FACE　to　FACE でることの重要性を認識した。日本メンバーについてだが、私は和歌山県出身のため、関先生以外のメンバーとは出発前日に初めて会った。もちろん、事前に何度か Skype 等を用いて交流を図っていた。Skype の内容としては、雑談や今後のスケジュールなど幅広く会話し、パソコンの画面には各々の顔も映り、ある意味 FACE　to　FACE であったと言える。しかし、当日はお互いに日本語で容易にコミュニケーションが取れ、同じ学生であるにも関わらず、緊張し話すことができなかった。案の定、ネパールに到着し交流を行うが、始めはまともに会話すらしていない。これは、英語の上手下手に関わらず言える。ただ、時間が経過するにつれて会話が弾むようになってきた。これは同じ時間・空間を共有してきたからだと考える。

この経験から FACE　to　FACE の重要性に気付く。やはり、互いに顔を見せ合い、同じ時間・空間を共にすることで生まれる信頼関係は非常に密の濃いものである。確かに人と直接会う時間を削減することは、時間の有効に活用する方法の一つであるかもしれない。実際、LINE や Skype は便利であり、ビジネスではメールや電話で済ますことも多々ある。削減し、生まれた時間を有効活用しているのが現代の傾向であり、それが望ましいことであると考えられる。しかし、私は無意味かもしれないが人と人とが直接会い、話す時間を取る重要性を訴える。同じ目的の達成のため、互いに win-win の関係を構築するためには FACE　to　FACE はなくてはならない。これを削減してしまえば、人と人との関係性は薄く内容の無いものとなる。

そして、国際交流では「郷に入れば郷に従え」という事を意識する必要がある。これは、相手の価値観や考えに合わせるという個人ベースではなく、その土地や国の固定観念に合わせるということである。日本とネパールは明確に国民性では異なる部分がある。例えば、時間厳守の重要性やメリハリを持つことを日本人は重んじる傾向にあるが、ネパールはそうでないという点があげられる。異なる価値観や考えから分かる点もあり、それを押し付けることは横暴でしかない。

つまり、交流の際は互いに認め合い、FACE　to　FACE を実践することが重要である。同じ学生、異なる国であっても、単純にそれを繰り返していくことで人と人とは繋がると考えられる。

「本当の国際交流を経験したスタディ・ツアー」

小田 碩規（東京大学１年）

近年、「国際交流」とか「学生交流」という言葉をよく耳にする。では、「国際交流」とか「学生交流」とは一体、どのようなものなのだろうか。海外の学生と英語で話をする、異国の文化に触れる、などといったことが挙げられる。しかし、そのようなことだけに終始してしまっては本当の「国際交流」とは呼ぶことができないと私個人は考える。

本当の「国際交流」の意義は、様々なバックグラウンドを持った異国の学生と共通の問題を考え、悩み、議論することで思いもよらなかったアイデアを生み出すことにある。

この観点から考えると、Mero Sathi Project は本当の意味での「国際交流」を体現したと言える。

本稿では交流を通して感じたこと、交流によって得ることができたアイデアについて述べる。交流を通して感じたことはコミュニティーの違いや、常識の違いである。今回の Mero Sathi Project ではカトマンズ寄りのヌワコット村、ポカラに近いシクレスという集落を訪れた。ヌワコット村では被災地の現状を知るアクティビティーを行った。いまだに満足いくような支援が行われているとは言えない集落に対して、インフラの整備が優先されるべきか、収入を得るためのリソース支援が優先されるべきかについて議論したことは今後、復興や開発を学ぶ際の一つの視点となった。ヌワコット村で衝撃を受けたことは、環境問題に対する無関心さである。プラスチックの袋を燃やしたり、焼畑をしたりと、日本では一般的に環境にとって悪影響であると認識されていることが普通に行われていた。

シクレスではグルン族の習俗に大きな衝撃を受けた。女性に対する制限、カーストに関する差別、近親者と婚約するという進化的に利点があまりない結婚制度など、日本では考えることができないような習俗がシクレスには存在していた。

今回、交流をする中で様々な興味深いアイデアが生まれたが、最も印象的なものは「心の豊かさ」についてのアイデアである。日本人グループが今回の Mero Sathi Project での目標としたものの一つに「心の豊かさってなんだろう？ネパール人の心はなぜ豊かなのだろうか？」というものがある。ネパール人メンバーや、ヌワコット村の村人たち、シクレスのグルンの人々の間には「心の豊かさ」に関する似通った考えがあることを感じた。それは「現状を楽しまなければならない」というものだ。無い物事を嘆くよりも今あるものを最大限生かして楽しまなければいけないという考え方が彼らの頭にはあるのだ。このようなネパールの人々のポジティブな考え方が彼らの心を豊かにしているのだ。この考えは現代日本人の心を豊かにすることにも役立つ。無いもの、失ったものに固執し、現状を楽しむことができない人々は、一度自分の置かれている状況を見直して生活を楽しむために活用できるものは残っていないかを探してみるべきだ。

このように発展途上国のネパールから先進国で暮らす我々が学ぶことは大いにある。異国の学生と共通の問題について考え、議論し、時には教え、時には教わり、革新的なアイデアを生み出す。これが私の考える国際、学生交流のカタチだ。

「真の学生交流は互いに関心を持って相手の事を理解したその先にある」

永渕沙也花（上智大学１年）

今回、このツアーを行うにあたってネパール渡航前に日本からのメンバーが全体の目標として掲げた事、それは“現地の学生との交流を通して得た気づきから多くの学びを得て自分自身の心を豊かにする”、また“お互いの共通点や良いところを見つける”という事であった。途上国に行くと、我々日本の様な先進国から来た者は無意識的に自国と比べて劣っている面に目を向けてしまう。実際に、私自身も昨年の夏にカンボジアへ行った際、初めはストリートチルドレンや都市部と農村部間の格差、ゴミ山といったカンボジアの抱える貧困を始めとするあらゆる社会問題に目を向ける事が多かった。しかし、周りを見渡してみると、そこには日本にはない様な景色、農村部におけるゆったりとした人々の暮らしといったそこにしかない魅力が多くある事に気づかされた。そのため、今回のネパール滞在では目標にもある国の魅力やそこにしかないものを見つける旅にしようと決めていた。

実際に現地に赴いて日本へ帰国した今、実感しているのはネパールには多くの魅力があり、それはある意味日本が先進国として発展していく中で失いかけたものなのかもしれないと言う事である。それらは、あらゆる場面にわたっており、例えばネパールの人の時間の過ごし方や村の伝統的な儀式やコミュニティー内の人々の繋がりの深さであったりと、様々である。さらに、その一つとして、現地の学生の持つ学びに対する追究心や探究心といった積極的な姿勢にはこのツアーを通して私自身大きく刺激を受け、また自分自身の意識のあり方の変化にも繋がった。

ネパールに到着して、初めは英語でのコミュニケーションの環境に中々慣れず、自分から積極的にコミュニケーションを進める事が困難だった。しかし、私が理解できていないとゆっくり分かりやすい言葉で話しかけてくれたり、いろいろな質問をして積極的に会話を進めてくれたりする現地の学生達に何度も救われた。

ツアーの終盤には、村でのインタビューといった実践的なプログラムを終えて行く中で国の抱える問題といったアカデミックな話を日常的にする事が出来る様になった。私が元々関心を持っていた教育問題についても実際に現地の学生と話す中で、何が原因で問題解決のために今、一体何が必要とされているのかといった現地で生まれ育った学生の生の声を聞いてみて日本にいる時には得られなかった新たな視点を得る事が出来た。こうした現地学生と過ごす日々を通じて実感したのは、真の学生交流は互いに関心を持って相手の事を理解したその先にあるということであった。また、実際にその国で生まれ育った学生と話し、さらにその現状を自分の目で見てみて、初めて正面から課題に向き合う事が出来るのだと２週間を通して強く体感した。その意味で、学生交流はその国をよく知る上で重要な過程であると思う。国の将来を担うのは、どの国や地域においても若者であり、若者とはその国の最大の財産であると思う。だからこそ、様々な国の学生が自分とは異なる環境下で生きてきた学生と関わり、自分の価値観や知見を広げる経験の出来る学生交流は今後益々普及すべきであると思うし、私自身もっと色んな国の学生と関わり、１つ１つの出会いを大切にして行きたいと思う。

「私が体験した学生交流―成果と課題―」

山岡大地（上智大学１年）

１．はじめに

私は高校生のとき一年間の留学を経験した。アメリカの公立高校に通いながら留学生用の寮で暮らしていたため、毎日が「国際交流」だった。中国人、タイ人、ベトナム人、ドイツ人、デンマーク人、イギリス人、スペイン人、イタリア人、フィンランド人、メキシコ人、ブラジル人、そして日本人が同じテーブルを囲み、一つ屋根の下で一年間生活を共にしたという経験は、現在の私にとってもかけがえのないものである。英語でのコミュニケーション能力を培うと同時に、「国籍が違う者同士でも友達、あるいは家族のように親しい関係を築くことができる」ことを学んだ。

今回のスタディ・ツアーのテーマは「学生交流」であり、ネパール人メンバーと日本人メンバーが行動を共にし、関係を築いていく中で新たな学びを得ることを目的としていた。日本人メンバーの中で海外での長期滞在の経験があるのは私だけだったため、より積極的に現地の学生と交流し、必要に応じて通訳などで学生同士のコミュニケーションをスムーズにすることも私の役割だと考えていた。

この報告書では私が体験した「学生交流」に関して、その成果や感じたことをいくつかの項目に分けて述べていくことにする。

２．現地の学生と行動するメリット

現地の学生と行動するメリットとして、その地域により深く入り込んで学びを得られることが挙げられる。例えば地震の被害が深刻だったヌワコット村でフィールドワークを行った際、ネパール人と日本人がペアになり家を訪問するという形式をとったが、この試みは非常に効果があった。私が訪ねたご家庭は夫婦二人暮らしで、地震によって自宅が損壊し、現在は隣に建てた仮設の住宅に住んでいた。これらは外見からでも分かることだが、ネパール人メンバーの通訳を介してご夫婦が直面している課題や、彼らの今の心情についても聞くことができた。実家が壊れてしまったため、首都で暮らす息子たちが以前ほど頻繁に帰省することがなくなり、ご夫婦が寂しい思いをしていること。地震によって収入源を失い、飼っていた牛を売って一時的に金銭を得たが、行政による支援もないため生活が非常に苦しいこと。仮設の住居には雨水が入り込み、蛇なども容易に侵入するため夜間怖くてよく眠れないこと。これらを知ることだけでも現在の支援のあり方や国の復興への取り組みについてより深く考察することができた。通訳を担ってくれた現地メンバーとインタビューに答えてくださったご夫婦にはとても感謝している。

３．言葉の壁をやぶること

ツアー中、私が最も意識していたことは、とにかくネパール人メンバーと話をすることだった。「ネパール人の前では日本語で会話しない」というルールを日本人メンバーの中で決めていたので、移動中なども可能な限りネパール人学生の輪の中に入り、英語でコミュニケーションすることで徐々に信頼関係を築くことができた。他のメンバーから通訳を頼まれる場面もあり、私がツアーに参加している意義を見出すこともできた。一方、ツアーが後半になるとルールが曖昧になってしまい、日本人同士の会話が増

えてしまったことは反省点として挙げられる。

言葉の壁は厚く、ツアー中に完全にそれを取り払うことができたわけではない。私の英語力の未熟さを実感する場面も多々あった。しかし、ポカラからカトマンズへ戻る道中、双方の国の教育、政治、歴史など学術的な事柄について踏み込んだ話をネパール人メンバーとすることができ、自信につながった。ネパール人メンバーが英語を話す能力に長けていたことは、単純にコミュニケーションをとりやすくしてくれる以外のメリットがあった。彼らがシンプルで的確な単語を使いこなし、会話の中で手本を示してくれたことは、これからも継続して英語を学ぶモチベーションを私に与えてくれた。

４．「違い」を認め、それと向き合うこと

上述のとおり、私は「国籍に関わらず、人は友人関係を築くことができる」と考えており、今回のツアーでもネパール人との交流の中でそのことを実感できた。一方、日本人とネパール人の間に差異を感じることも多々あった。例えば、日本人は集合時間５分前には集合するが、ネパール人は集合時間５分後に集合する。大したことではないようにも思われるが、ツアーを円滑に進めていく上では問題である。時間を守る日本人が正しいわけではないし、時間にいい加減なネパール人が正しいわけでもない。ただ、互いの習慣や育ってきた環境により必然的に「違い」が生じているのだと実感した。

このことは決して時間を守る、守らないといった話に留まらない。ツアーに参加した目的ではネパール人と日本人の間に大きな差があった。ネパール人は日本人との交流よりも、ネパールの様々な場所を巡るというツアーの内容にひかれて参加したメンバーが多かった。また、ディスカッションの時間を確保したいと日本人の学生が提案し、了承したはずの現地コーディネーターがなかなかその場を用意してくれず、苦労するということもあった。ヤギ小屋プロジェクトを現地の住民と進めていく上でも、その持続性・汎用性が今後の課題となる。しかし、どの状況においても「なんで言うことを聞いてくれないのだ」と投げ出すのではなく、相手との「違い」を素直に認めることが必要だと思う。その上で、現地の人たちに寄り添い、どう折り合いをつけて活動を進めていくかを考えていくことが重要だと強く感じた。

５．次につなげること

二週間の旅を経てネパール人メンバーとの絆は強固なものとなった。また、彼らとの会話、ダンス、歌、食事、全てがかけがえのない思い出として残っている。この点において今回の「学生交流」は成功だったと言える。

「学生交流、国際交流を通じて学んだこと」

吉川夕葉（上智大学１年）

最初に、この AAEE 主催のスタディ・ツアーはアジアの学生の交流を促進することを目的に企画されたものである。すなわち今回のツアーでは参加学生が学ぶことについて、学生交流が最大の目的、また基盤となっている。本稿ではこの、学生交流、国際交流に対して感じたこと、学んだことについて述べたい。

今回ツアーに参加するにあたり、自身の目的としてネパール人学生との交流、自分自身をより良く知ること、ネパールという国を知り、感じること、の３点を意識し、特にツアーの目的でもあるネパール人学生との交流に重点を置いていた。この点において、私は以下の２つのことを学ぶことができた。

まず、第一に挙げられるのは、国際交流における人間レベルでの交流の難しさである。私は大学内の国際交流サークルに所属しており、留学生と関わる機会を日常的に持っている。約１年の活動を通じて、国籍や出身国が異なっていても中身は人間皆同様であり、性格や人間性などは同じ人間として普遍性があるということを学んだ。留学生と接する中で「留学生」や「アメリカ出身の人」などという立場に過剰な意識があったり、フィルターをかけたりすることで、自身の中で日本人の友人とは別に区分してしまい、その人自身の人間性を知る段階まで辿り着かないことが予想される。ここに、国際交流の難しさがあるのではないだろうか。実際に、活動を始めた初期の頃、留学生と、「留学生」としてしか関わっていない自分の姿勢に気づき、以来正規生も留学生も同じ人間だと考え、一人の人間として関わるように意識してきた。ネパールの学生に対してもそれは同様で、日本の学生とネパールの学生、という立ち位置ではなく、生きている環境は違うが、立場の同じ学生同士として交流し、意見交換をしたいと考えていた。出身国には固執しすぎず、議論の際の引き出しの一つとしてツール程度の意識にとどめておくようにして活動を行った。

結果として、ネパールの学生それぞれの性格や人間性を掴むことはできたと思っている。しかし、２週間彼らと関わる中で人間として接することはできたが、日本人を対象にした場合のレベルまでは達していない。意識をしてもなお、なぜ関わり方が同国出身者と他国出身者とで差が生まれるのだろうか。この理由として、第一に言語の壁、第二に根本的な前提意識が考えられる。お互い英語を勉強してきたとはいえ、交流の上で言語は大きな壁となってしまう。ましてやスピーキングが苦手と言われている日本人にとって、言語の壁は高い。意思疎通に苦労している段階で、互いの人間性を探り、その人自身を知ることは難しい。留学生と接する中でその難しさに気づき、また、今回のようにスタディ・ツアーという特殊な形で、短期間だが凝縮された濃い時間をネパール人学生と過ごすという非日常的な体験を通じてより一層日本人と外国人、という壁を感じた。自分が意識しないように意識していたため、よりその壁の存在を感じる場面が多かったように思う。そしてその日本人と外国人、という壁は、作るというより前提意識として出来上がっているものであると考えた。他国に比べ外国人と関わる機会の少ない日本は、その前提意識を持ちやすい傾向にあるだろう。その前提意識を崩すには、外国人や異文化を持つ人間との交流への慣れが重要であると考える。それには相当な時間と労力が必要であり、しかし前提意識を超えた交流ができて初めてフラットな議論や精神的な疎通ができる段階に進むことができるのではないだろうか。

二つ目に学んだことは、学生交流の意義についてである。近年、国の将来を担う学生同士の交流の大切さを主張する文句などを目にする機会がよくあったが、今回のツアーでまさにそれを実感した。そして、ネパール人との交流の中で、自分なりの学生交流の意義を見出すことができた。特に学生交流の大切さを実感したのは、自由時間に真面目なトピックについて議論した場面と、アクティビティーで村人へのインタビューを実施した場面だ。移動などの時間に、様々なネパール人学生に政治や児童労働問題、教育などについての話を振り個人的に議論をする機会があった。基本的にはネパール国内のことに基づいてネパール人学生の話や考えを聞き、それに対して私が質問を繰り返し、解決策にまで話を及ばせていたが、他国の学生とこのようなトピックについて語り合う経験が私にはなかったため非常に新鮮さを感じた。日本国内では、ネパールは発展途上国の例として話が上がることが多いが、日本側の視点からネパールについて勝手に議論している問題を、ネパールに入り内側からみて、また実際に住んでいる人の視点から問題についての意見を聞くことができたのはとても興味深い体験であった。また、プログラム内容に設置されていた、村人にインタビューをするアクティビティーは、まさに学生交流がないと成立しないものであった。具体的な内容に言及すると、日本人とネパール人でグループを組み、ネパール人の通訳を頼りに村人との質疑応答を行うものである。普通、フィールドワークを行うにしても、自身で言葉を勉強するか通訳を介するかしなければ村人にインタビューすることはできないだろう。しかし、その国の学生と助け合うことにより、一人よがりになりすぎない質問をすることができるし、外国からの視点と国内からの視点両方からの質問への答えを得ることができる。このインタビューの形式は、まさに学生交流のカタチを表したものであると感じた。

これらの考察から、支援を行ったり国際的な問題について議論をしたりする上での、学生交流やその国の人とつながって行動を起こすことの大切さを学んだ。支援を行う際に、支援先の人々と支援者が直接コミュニケーションを取ることは困難である。さらに、大抵の場合支援者は国外からの視点で支援を考える。その場合、ズレが生じてしまうことが多い。その際、すでにその問題について知識がある現地の学生と協力することで、一人よがりになりすぎず、また、国外と国内の視点から一緒に解決策を考えることができる。学生交流を行う利点はここにあると考える。支援者の一人よがりになりすぎず、しかし国内では不足している力を国外から合わせることができる。支援先の人々、支援者、それを仲介するその国の学生、というバランスが支援においてとても効果的に働くのではないだろうか。

また将来国や世界を担う学生同士が交流することで、将来の協力体制が整いやすく、問題の解決につながると考えられる。解決策を模索することを目的とした純粋な議論ができるのは学生ならではであり、国内にとどまらない世界規模での交流から、全く新しい視点に気づきそこからの意見を得ることができる。そして学生の時に得たそのつながりが、将来国や世界を担う立場になった時に生かされることが期待できる。以上の考察が、私なりに見出した学生交流の意義である。この意義が根本にあることで、様々な学生交流が形作られていくのではないだろうか。そして国際的な学生交流の場がより増えていくことで、将来的には世界規模でのつながり方も変化していき、問題解決においても今までとは異なった世界の進み方になっていくのではないだろうか。

「百聞は一見にしかず」

吉田莉乃（啓明学園高校３年）

学生交流とはただ現地の学生たちとコミュニケーションをとることではない。私は今回このスタディ・ツアーに一緒に参加してくれたネパールメンバーがいたことで、日本人だけでは決して味わうことのできなかった経験をすることができた。

例えば、ノワコットで行ったヤギ小屋プロジェクトのオーナーへのインタビュー。ネパールメンバーは、ネパール語しか通じない村の人々の心の内を私たち日本人メンバーのために解釈を交えながら丁寧に通訳してくれた。特に私はこのインタビューを通して、支援村の人々がどのような思いでこのプロジェクトに携わっているのか、そして国の発展にどう寄与していきたいのかという胸の内まで知ることができた。この経験は、国際協力に関心を抱いていた私にとってとても有意義なものであった。現地の人の声なしではニーズに応えた支援はできないのだと最も大切なことに気付かされたのだ。

このインタビュー以外でも、ネパールメンバーは国内の社会問題（特に出稼ぎについて）について、私の質問に熱心に答え、教えてくれた。その内容はとても多岐に渡るが、少なくとも、私がプログラムに参加する前に日本でネットや授業で学んだ内容よりもかなりリアルなものであった。「百聞は一見にしかず」と言う言葉の意味を痛感した。

また、ネパールのメンバーはしっかり勉強を重ねた大変優秀な学生たちばかり。私の質問についてすべて完璧に答えてくれた。私が、来日した外国人の学生に日本の問題について、これほど細かく説明できる自信はない。その意味で私はこれから自国の問題についてもしっかりと学ばなければなけないとも思わされた。

もちろん、まじめなことだけでなく、ネパールの人気曲「レッサムフィリリ」の歌詞を覚えたいといえば必死に教えてくれたり、発音が違ったら大爆笑されたり、UNO を飽きることなく何回も熱中してやったりと２週間でこんなにも仲良くなれるとは正直思っていなかった。

渡航前は異文化体験ということに抵抗を感じていたが、考え方やノリの違いはあるものの、現地の同世代の学生たちと同視点で交流できた点では決して「異文化」ではなかったのではないかと感じた。

学生はこれからの世界を担っていかなければならない。国際的な学生交流イベントにおいては、ただコミュニケーションをとって仲良くなるというだけにとどまらず、地球上で起こっている諸問題についてお互いに議論し、その解決のために議論することが大切だ。コミュニケーションや交流を通じて、自国内、自文化内での視点のみでは見えてこない新しい視点を互いに与えあうこと。それが国際・学生交流のあるべきカタチなのではないだろうか。

「英語学習へのモチベーションが俄然上がった旅」

米原槙子（上智大学１年）

「交流」をどのように定義するかにもよりますが、私はここで自分の思うような交流ができなくて、辛く悔しい思いをした体験を綴りたいと思います。
その体験の原因となったのは、いわゆる言葉の壁でした。私は、今回のツアーに対して本当に期待と気合で溢れていて、ネパールに着くまでは「言葉なんて関係ないし！英語ができなくたって笑顔でいけばなんとかなるだろう」と現地での英語での交流に関してはほとんど心配をしていませんでした。しかし、それは非常に甘い考えだったなと今は思います。いざ現地に着いて学生との生活が始まると、そこには（上智大学生としては非常に恥ずかしいことではありますが)、日常会話すら成り立たせることに苦労している自分がいました。自分で話をもちかけても相手の答えが理解できないから会話が続かず、どうすることもできなくなってしまった状況のなかでは、持ち前の明るさも発揮できずに黙っている場面が多くありました。自分の想像していた関わり方ができず、これで交流になっているのかと本当に悩み、意思疎通ができず自分を表現できない辛さを感じたのと同時に、自分の英語力の低さに失望しました。

また、会話が思うようにできないというこの単純な辛さ以上に大きかったのが、現地の学生たちと学問的な話だったり、各々が勉強していることや興味のあることについてだったりの深い話ができなかったことへの悔しさでした。たしかに、「心を通わせる」ことは、言葉がなくとも可能だと思いますし、それは非常に大切なことだと思います。（またはそれこそが「交流」のすべてかもしれません）実際、私もツアーの終盤では、慣れと彼らとともに過ごした長い時間のおかげで素が出せるようになり、またみんなの性格などが見えてくることで、少しずつ「各メンバーとの距離を確実に近づけていくことができているな」と実感できるようになりました。くだらない話ではありましたがみんなで盛り上がってふざけていた時間などは純粋にものすごく楽しかったし、些細なことではありますが、そのようにみんなと楽しさを共有している時間が私にとってはすごく幸せでした。また、プログラムの内容の１つ１つのアクティビティーはとても充実していて、どれも貴重すぎる体験でした。

しかし、今回は私と同じように国際協力や地域開発に関心があり、自分の考えをしっかりと持ったネパールの学生たちが集まっていました。私は普段の彼らとの会話を通して、それらに分野の話題を通じて、意見を聞き刺激をもらい、自分の視野を広げることをものすごく楽しみにしていました。ですが、もちろん私の英語力ではそのようなアカデミックな話をすることは難しく、あまり深く語り合うようなことができませんでした。「ああもっと英語ができたら・・せっかくの機会なのに・・」と悔しくて情けなくてたまりませんでした。今回のスタディ・ツアーのような、ある程度深い内容を持つ国際交流の企画で、より多くのことを得るためには必要最低限の英語力というのは必須であることを痛感しました。

しかしこの経験のおかげで、私の英語学習へのモチベーションは俄然上がり、帰国後はいろいろな方のアドバイスなどもいただきつつ自分なりに英語の勉強を頑張っています。自分の身をもってその重要性を実感し、海外のたちともっと話せるようになりたい！と心から思うことができたから、このモチベーションを保ち続けられる自信があります。そう考えると、自分にとってはこの経験は自分にとって本当にためになったし、大きな意味をもつと思います。これからもっともっと勉強して英語力をつけて、またメンバーのみんなに会いに行く日が楽しみで仕方ありません！

「ネパール人についても日本人についても学んだスタディ・ツアー」

劉寛艶（東京経済大学大学院１年）

2016 年 2 月、人生二回目のスタディ・ツアーを行った。日本人の学生８人、ネパール人の学生７人、ネパール震災地を訪問した。私にとっては、非常に難しかった学生交流であった。それにしても、見つけたいものが見つけた。

難しい交流の一番の原因は言語の問題だった。ネパールへ行く前に、ネパール人の学生と交流するは英語しか使えませんと知らせられた。英語は日常会話でも困難な状態で行った。結局、私にとっては、ちょっと残念なツアーだ。うまく交流できなかったのは言語の問題だけではない。自分が、学生交流についての準備不足も大きいな要因だと思う。日本人のメンバーたちは、それぞれの勉強する目標をもってネパールを向って行った。自分だけが、そんな目標が持ってなかった。もう一つは、心理的なの準備も不足だ。ネパールに滞在した間で、自分がよく感情にはした。ずいぶん適当な性格で、いろんなルールを守られてなかった。そして、ネパール人の学生とも、日本人の学生ともきちんと交流でき上がらなかった。日本に戻してから、いろいろ反省した。

このツアーを通じて、何を感じたか？何を勉強したか？何を見つけたか？

ネパールに到着したとき、この国はまだ地震から回復していないことが直感じた。ネパールの首都のカトマンズには、住む家が持ってない人が多い。町で物乞いをしている子供も多い。建物、車、道路ボロボロして、空気もきれいではない。水不足、半日停電な首都である。電線が蜘蛛の巣みたい。自分の想像と大違い。二日目で、逃げたい気持ちが強くって、散々落ち込んだ。ちょうどあの日、カトマンズの孤児院を訪問した。四十人の子供がいるところである。十分間ぐらいで、子供たちと仲良くなった、一緒に歌を歌ったり、踊りを踊ったりして、落ち込んでいた気持ちが癒された。何より、私を驚かせたのは子供たちの笑顔だ。物質不足の彼ら彼女らは、豊かな心が持っている。現場で見た状況で分かった。四十人の子供たちはちょっと大きい子が自分より小さい子の面倒を見てあげる、部屋の掃除、庭の片づけ、当たり前ように行動していた。親切な院長のおばあちゃんを見ればわかる、心の豊の源は愛というもの。言葉は通じないあの孤児院で私がそう感じた。

そして、日本人の学生から最後まで諦めないことを勉強した。専攻問題について交流すると、言語力が足りないところが多少あると思う。しかも、都市生まれ都市育ちの日本人の若い学生たちにとって、ネパールの村で生きるだけで辛いかもしれない。彼ら彼女らは、言語の壁、環境の壁を乗り越えって自分が知りたい問題を底まで問い込んだ。そんな勉強の精神は私が持ってない。

見つけたものといえば、素晴らしい景色のほか、シンプルな民族雰囲気だ。シックレスというヒマラヤの山の下にある村で、フクロウ祭りが開催された。その祭りで、赤ちゃんから年寄りまで全員が出席したそう。伝統的な競技やゲームで、皆大笑い。簡単なもので、皆楽しんでいる。それは、心が広いか否かはわからないけれど、皆が自然なリズムで慌てずに生活しているからだろうかと思った。

今回のツアーで、自分の足りない部分を発見したこと、楽しんでいた時間、仲良くなった友達、美しい風景、大違いの文化等々。すべてがその時点でそのメンバーたちとで出来上がった――一生大切に保管してほしい思い出だ。一人との出会いはいつか一つのグループとの出会いになるかもしれない。その人たちと出会って、よかったとずっと思っている。

「スポーツフェスティバルについてのご報告」

文責：小田 碩規

このスポーツフェスティバルの目的はスポーツを通してポカラの学生たちとの交流をする目的で行われました。競技としては以下の 4 つを行いました。

1. チーム対抗大縄とび
2. リレー形式の二人三脚
3. サッカー
4. チーム対抗リレー

ネパールでは男女ともにサッカーの人気が特に高く、サッカーのユニフォームを着ている子どもが多かったです(余談にはなりますが、FC バルセロナのユニフォームを着ている子が多く、FC バルセロナが人気なのか、はたまた地震の際になんらかの支援があったのかもしれません)。

競技はスポーツフェスティバルのリーダーである小田と学校のネパール人メンバーが協力して行いました。競技の運営は順調に進み、大いに盛り上がりました。

スポーツフェスティバルの運営を通して感じたことが 2 点あります。まず、最初の 1 点目はスポーツの楽しさは言語の壁を越えて共有されるということ。日本のテレビ番組などで有名なスポーツ選手が途上国を訪れてスポーツ教室などを行うという企画のものをよく見ますが、私はスポーツの楽しさは万国共通といった考えには少々懐疑的でした。言語の壁には敵わないのではないかと思っていました。しかし、学校の生徒たちの楽しそうな顔や日本人メンバーの楽しそうな顔を見ていると、スポーツの楽しさは国境や言語の壁を取り払ってくれるものだということを実感しました。今後もこのような企画が途上国で運営されるべきだと強く感じました。

2 点目は、異国の地、異国の人々の中でリーダーシップを発揮することの難しさです。言語も考え方も違う、そんな集団をまとめ上げていくことは困難を極めます。実際、私もネパール人のリーダーに頼っていました。相手の意見にしっかりと耳を傾け、何を行えばいいのかを考える、そのようなことの繰り返しが異なるバックグラウンドをもつ人々の集団をまとめるコツなのではないかと感じました。この経験を次なる学びに活かしていきたいと思います。

「食文化交流企画について」

文責：米原槙子

私たちは、食文化での交流ということで、お互いの国の代表的な料理を作って食べるという企画をヌワコット村で行いました。

まず 16 日の夕飯の時間を使いネパールの学生たちが私たちに料理をふるまってくれました。作ってくれたのはライスプディングと呼ばれる料理で、牛乳にお米、ナッツ類、ココナッツ、砂糖をいれて煮込んだいわば牛乳粥です。「牛乳にお米に砂糖！？正直まずそう・・」と思われる方も多いと思いますが、意外にもこれがかなり美味しかったです（笑）日本ではなかなか味わうことのできない味なのでとても良い体験でした。

そして１７日の朝食の時間に、私たちは焼きおにぎりと焼き餃子を作りました。時間の関係上私たちが作り、ネパールの学生たちには食べてもらうだけのつもりでしたが、ホームステイさせていただいた村の家の人たちも学生たちもみんな日本料理にすごく興味を示してくれて、一緒に作業をして楽しみました。みんな餃子の皮でひだを作りながら餡を包んだり、おにぎりを握ったりしながら「うまくできた！」「これ合格かな？」とすごく盛り上がっていました。また、一緒に作業をしながらお互いの国の食について話したり、「ネパールにも似たような食材があるよ～」と雑談を楽しんだりしたのも良い思い出です。みんな味のほうもすごく美味しいと喜んでくれました（焼きおにぎりが特に高評価でした！）。

やはり食というのはその国に興味をもつきっかけとしてすごく大きなものであると改めて感じたし、一緒に料理する時間を通して学生たちとの距離も縮めることができたので、企画してよかったと思いました。

＜料理風景＞

＜料理風景＞

＜餃子＞

＜焼きおにぎり＞

＜ライスプディング＞